

待降節第一主日

2016.11.27

イエズス会司祭 鈴木伸国神父

マタイ 24・37-44

まったくの私事で失礼いたしますが、わたしは「お父さんっ子」だったような気がします。郷里の家は、今は建て替えて近代的な便利な二階建てになりましたが、わたしが小さかった頃は藁葺きにトタンをのせた大きな母屋の四隅に、二つの離れと、台所と長屋を置いた、日本の地方の農家らしい作りでした。寒い季節にはコタツに入るとき、父のひざはわたしの「特等席」でした。兄は三つ上でそこを争ったおぼえもありますが、兄がそこを手放してから、五つ下の妹がその席を占めるようになるまで、そこは「わたしの席」だった気がします。父は両手でわたしを拾い上げ、そこに座らせてくれました。

父の肩を揉むのは家族の中でわたしの役目だったのか、それともただわたしの趣味だったのかわかりませんが、父はわたしに肩を揉ませてくれた気がします。そのおかげか神父になってからも、炊き出しをするときに、(わたしのお説教を喜んでくれたひとがどれくらいいたか知りませんが)おじさんたちの肩を揉んで喜ばれなかったことはありません。

また肩車に乗せてもらうときにはまるで世界の王様にでもなった気分だった気がします。よく考えれば、週日は朝晩一、二時間の通勤をして、わたしたちが起きる前にでかけて、わたしたちが寝てから帰ってきていた父が、よくも休日にはわたしを肩に乗せて、家の周りを散歩したり、釣りに連れていってくれたものです。それでもやはり、父がわたしの脇に手を入れて引き上げ、自分の頭をまたがせて肩に乗せてくれたときの情景や高揚は忘れることができません。

今日の福音には「連れて行かれる」\*という言葉の入った句が出てきます。

そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。(37-42 節)

わたしはこの箇所を読むと何だか、少し怖いできごとのような気持ちになったものです。このすぐ前にはノアの箱船の話が引用され、洪水が一人残らず「さ

らって行ってしまふ」ことが語られていますし、直後には泥棒が夜しのびこむことが語られ、それが「思いがけないときに来る」とありますし、そもそも今日の個所の全体は「目をさましていなさい」、「気をつけていなさい」という何やらわたしたちに警戒を呼びかけ、脅かすようなムードにつつまれています。そのなかで、いつか分からないときに誰かが来て、わたしたちをどこかに「連れて行かれてしまふ」と語られると、まるで人さらいか何かの話のようにも思えて、それなら、残された人の方がいいと思ってしまったりもしました。

でも実際にはその言葉は、随分とちがうイメージのある言葉です。今日の聖書とおなじマタイから例をとってみましょう。イエスは生涯の転換点となる大事なときに「ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて」（17・1）、高い山に登ります。またエルサレムへ上って行く途中には「十二人の弟子だけを呼び寄せて」（20・17）、その後ご自分の身に起ることを告げられます。オリーブの園に向かわれるときには「ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われ」（26・37）しました。そうしてみると「連れて行かれる」のは実際はさほど悪い話でもない気がします。

それよりもこの言葉は（場合によっては悪魔がイエスを聖なる都の神殿の屋根のうえや、とても高い山の頂に「連れて行く」ときにも使われますが）、クリスマスの時期に読まれる聖書箇所でもおなじみのものです。天使はヨセフに「恐れず妻マリアを迎え入れなさい」（1・20）と夢の中で呼びかけ、眠りから覚めるとヨセフは天使の言うとおりに「マリアを妻に迎え入れ」（1・24）ます。さらに天使はこうして生まれた小さな家族が危険が迫るとヨセフに「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げなさい」（2・20）と呼びかけます。この言葉はこの小さな家族には、はじめから近しかった言葉のようです。

待降節はたしかに「気をつけて」、キリストの到来を待つ季節ですが、そこでわたしたちがこの四週間を怖々過ごしてしまうとすれば本末転倒です。この待つ季節の終わりに到来してくれるのは恐ろしい審判者ではなく、わたしたちに笑顔を向け、わたしたちのところに光をともしてくれる小さな赤ちゃんです。やわらかな手足とほっぺたをした幼子で、そしてわたしたちの希望、わたしたちの救いとなってくださる方です。この方がわたしたちを「呼び寄せ」、「迎え入れ」、場合によっては「引き上げ」、ご自分でいっしょに「伴って」、「連れて行って」くださる方です。そうならそこで「取り残され」ては、いいことは一つもありません。

わたしの信仰を育んでくれたたくさんの神父さんたちは、待降節（アドベント）のあいだには手をかえ品をかえて、「今行くよ」、「来るからね」、「もう少しだよ」、「ほらほらもう着いちゃうよ」とご自分の到来を告知する主イエスの語

りかけ（「我、到来す」\*\*）を感じさせようと、いつもありったけの工夫をしてくださっていたように思います。そのおかげか、わたしにはこの季節はとても貴重なものになりました。

一番親しい友に出会うとき、わたしたちが彼の見知らぬ態度で見られたら、格好わるいでしょうし、バツもわるいでしょうし、何より悲しいことだと思います。幸い今年カレンダー上、ほぼ最長の待降節になる年にあたります。わたしたちが怖々ではなく、本当に待ち焦がれて、でも心から安心して、彼に出会うのにふさわしい者になろうとし、いようとつつ、この季節を過ごすことが出来ますように。またそのときにはわたしたちが皆、彼を抱き上げることをとおして、連れて行っていただけますように。

注： \* — Paralambano

\*\* — “Advenio.”